

民主主義を捨ててしまった西側世界

【訳者注】P・C・ロバーツが、西側世界の道徳的墮落を指摘し、彼らが基本的にサタン世界に住んでいるというのは正しい。彼らの背後にあるのはルシファー信仰で、したがって彼らがあらゆる悪徳（嘘、殺し、冷酷など）をほとんど隠そうともしないのは、それが彼らの本来の世界だからだと考えられる。キリスト教の徳目の逆を行うほど、サタンを喜ばせることができる。そのような霊的観点がなければ、今起きていることは理解できないであろう。もはや唯物論の時代ではなくなり、スピリチュアルな信仰の対立が、この時代の本質だと考えてよい。ベネズエラのチャベス大統領や、エクアドル大統領の言ったようなこと (p.2) を、国連のような場所でもっと言えばよい。真実を言うのに遠慮することはない。

By Paul Craig Roberts

September 23, 2015, Information Clearing House

西側は、民主主義を外国に広めるといふ前に、自分自身の心配をしたらどうだろう。アメリカは寡頭政治で、政府は、6つの強力な私企業に対して責任を果たすだけである。ヨーロッパの政府は、EU、ワシントン、私立銀行に責任を果たすだけで、人民はどうでもよい。イギリスでは、軍の大物たちが権力の手綱を握ると宣言した。

Jeremy Corbyn は、労働党を率いる、久しぶりに初めての労働党員となった。保守党の愚劣さと不道徳を考えるなら、コービンが英首相になれるはずである。もしそうなれば、コービンは、予算の優先順位を、ワシントン政府の戦争の支援から切り離して、英国庶民の生活をもっと安定させ、ストレスのないものにする社会福祉政策に向けることだろう。

ある英軍の高官がこう言った——軍は「人民が、一匹狼的政治家に国の安全保障をまかせるのを許さない。英軍はそういう考えには反対で、それを妨げるためには、正邪を問わず、あらゆる可能な手段を用いるだろう。」

言い換えると、英軍にとって受け入れがたい、民主的な決定は覆すということである——エジプトの場合のように。

ここに見られるのは、自分自身は民主主義など顧みず、他国に対しては、ウラジミール・プーチンが“空爆民主主義”と呼んだものを通じて、民主主義を押しつけるという、ワシント

ンとロンドンに共通の方針である。最も安全な結論はこういうことになる——民主主義とは、米英のエリートにとって、侵略のアジェンダの隠れ蓑であって、それ自体価値をもつものでなく、彼らは支配者として、自分の私的な利益のために、これらの国家を支配し続けるつもりでいる。

Jonathan Cook の報告によると、「正邪を問わず、あらゆる可能な手段を用いる」やり方は、エリートのためでなく人民のために働こうとする、労働党首相すべてに対するもので、コービン党首だけに向けられたものではない。労働党首相だったハロルド・ウィルソンは、同じような圧力に直面して辞任した。

私の理解するかぎり、西側世界は、民主主義を捨て去っただけでなく、同情、他者に対する感情移入、道徳、真率さ、真理への敬意、正義、忠実さ、それに自尊心をも捨ててしまった。西洋文明はうつろな貝殻になってしまった。残ったのは、食欲、強制、それに強制の脅迫だけである。ロシアのプーチン大統領が、西側の“パートナー”になりたいと言うとき、それは人類の利益のためにもともに行動したいという意味だが、私は、なぜこんなに強力で、暗闇から光の中へ現れてきた国家が、**サタン**のパートナーになりたがるのか不思議に思う。

ロシアは、ベネズエラのウーゴ・チャベス大統領が、2006年9月20日、国連で行った勇気あるスピーチを忘れるべきではない。演壇に立ったチャベスは、ブッシュ大統領が前の日、ここに立ったとき、「サタンそのものが世界を所有しているような話し方でした。まだここは硫黄の匂いがしています。」と言った。アメリカの目的は、とチャベスは言った、「世界の人民を支配し、搾取し、略奪するというパターンを維持することです。」

チャベスの言葉は、アメリカの政治家にとって、あまりにも真実であり過ぎた。米下院の超富豪スピーカーNancy Pelosi は、このような演説は「そこらの殺し屋」に似つかわしいものだと言った。

別の所では反応は違っていた。エクアドルの現大統領 Rafael Correa は、チャベスがサタンを侮辱したのは、サタンは、ワシントンのように悪だが、少なくとも彼は賢い、ところがワシントンは完全に馬鹿だからだ、と言った。

西側世界は完全に死にかかっている。失業は、ヨーロッパやアメリカの若者にとって、恐るべく深刻な状態にある——特に高学歴者にとって。若いアメリカの女性は、学生負債に困って、インターネット・サイトに広告を出し、セックスと引き換えに援助を要求する“sugar daddy”を求めている。「教育が解決だ」という安易な答えは嘘である。博士号取得者たちが就職できないのは、大学の予算が、戦争のための節約と、銀行への公的資金援助のためにカ

ットされ、残りの 75%の予算は、大学の職員自身のサラリーとボーナスに使われるからだ。例えばニューヨーク大学は、より高位の職員に、高額な避暑住宅を与えている。アメリカの大学総長は超高給取りで、学生は負債にあえいでいる。

ウォール街の精神構造——限りない食欲さ——がアメリカ人の生活を占領し、この食欲がヨーロッパへ輸出され、これが労使関係でも共有されるようになった。今日ヨーロッパは、アメリカと同じように、若者にとって絶望的に機会のない社会となった。ギリシャは私的銀行家のために犠牲にされ、イタリア、スペイン、ポルトガルも、同じ運命が待っている。独立したヨーロッパ諸国に代わって、ファシスト中央集権が起りつつある。

ワシントンとその NATO 実行者の戦争による何百万という難民が、ヨーロッパに避難場所を求める一方で、社会福祉のための予算はさらに切り詰められている。

近年、我々が目撃しているのは、私的銀行家が、EU を通じて、ギリシャやイタリアの民主的ということになっている政府の、政治を指図できるという事実である。

西側世界では、富める者の貴族政治が再び定着しつつある。もしロシアと中国がこの“パートナーシップ”に加わるならば、そのときには、何十億の人民が、一握りのメガリッチなエリートに支配されるだろう。

世界はナイフの刃の上を歩いている。西側は破滅した。ロシアと中国は、西側とともに沈没する可能性もある。なぜならロシアも中国も、暴政を経験しており、自由と解放の道を西側に求めているからである。しかし西側の道は、「世界の人民の支配、搾取、それに略奪」へと通じている。

ロシアと中国はこの略奪に参加するだろうか、それとも、彼らはそれに抵抗し、人類のために戦うだろうか？